隠国 KOMORIKU 通信 Vol. 12
The Letters From K.Kayamori in KOMORIKU.

# あつい夏に

2019.8.17

立秋を迎えてもどうしようもないほどの猛暑が続く。このコンサートを迎える頃には少し秋らしい風がたまには吹いてくれるのだろうか。この「通信」を書いているのはまだお盆前なのだが、この時期になると鮮明に思い出す風景がある。まだ大学生だった。長期休みになると必ずしていた酒屋の中元や歳暮諸々の配達アルバイト。ラジオから流れてきた「日航機遭難」のニュースに、ほぼ暮れかかった空の東の方を見上げた。その日航機に歌手の坂本九さんが乗っていたのだった。あの事故から34年がたった。

**九ちゃんが歌ったうた**

この演奏会の最後に演奏する「九ちゃんが歌ったうた　上を向いて歩こう」の終曲は「心の瞳」だ。坂本九の大ヒット曲といえば、1963年に「スキヤキ」として全米一位となった「上を向いて歩こう」、「明日があるさ」「ともだち」「見上げてごらん夜の星を」など。これらの大ヒット曲と比べると「心の瞳」の知名度は低い。しかしながら、合唱を中心に今多くの場所で歌われるようになるには次のようなエピソードがある。

坂本九がなくなる数ヶ月前にこの「心の瞳」ができあがった。坂本九は家に帰るなり興奮して、「ユッコ（坂本は妻の柏木由紀子をこう呼んだ）、今度の曲すごくいい曲だよ。僕たちの曲だよ。ユッコが聴いたら泣くよ。」と言って、デモテープを聴かせたという。それが坂本九最後の曲となってしまった。坂本九の「心の瞳」はメディアで一度しか流れていないが後に日本中に広まった。1985年9月1日、事故当日に収録された坂本九の最後のラジオ番組が放送された。その時に曲を聴いた中学校の音楽教師が翌年の卒業式で心の瞳を合唱。その噂が広まり、合唱曲として歌われることになったのだ。つまり、この「心の瞳」は中学校の合唱の現場でじわじわとひろがり、やがて、全国の合唱の愛好家たちからも支持を得ていく形になった、ある意味珍しい形での広がり方をした曲といえる。今日のコンサートでは、中学校の合唱の現場で歌われていた混声三部合唱を編曲した横山潤子さんの編曲で、すべての「九ちゃん」の曲が合唱で歌われる。

**知ることと感じること**

この「心の瞳」のエピソードを知ってこの曲を聴くのと、知らないで聴くのとは大きな違いがあるのではないだろうか。もちろん人によって受け止め方は違うし、「そんな先入観なしにこの曲のそのままを聴きたい」と思う方もいるだろう。それこそ音楽は個人的なものであり、聴き方も個人的で自由である。

近頃はクラシックの演奏会ではプレトークなどで作曲家や指揮者が作品について話をする機会が増えてきている。バッハアカデミー関西、教会暦によるカンタータシリーズでは、指揮者の本山秀毅さんが曲の演奏に先立って、曲についてのレクチャーをおこなうスタイルでコンサートをおこなっている。これは、彼の師匠でもあるヘルムート・リリングがGesprachskonzertという名称で、ドイツで盛んにおこなっていた形式である。（本山秀毅著「喝采、その日その日。」より）この著書の中で本山さんもふれているのだが、知的な音楽へのアプローチを好む人は少なくない。反面、音楽は「感じるためもの」であって、それを受け止めるためには先入観や予備知識など不要だという立場もある。クラシカルな音楽は知性と感性のバランスによってなり立っていると思う。中でも、合唱には言葉があるために知的な側面がより強いと考えている。知ることによって、さらに深く作品を感じることができると考えている。

**岐阜と京都**

Ensemble Kiikaは本年5月に京都の音楽の殿堂府民ホールアルティでEnsemble Clair,Kyotoと演奏会をおこなった。演奏会はほぼ満員のお客様から大きな拍手と声援をいただいた。ありがたいことに、岐阜から駆けつけて下さった方もおられて、感激もひとしおだった。その時の演奏曲もこのコンサートには含まれているのだが、さらにブラッシュアップして岐阜の皆さんにお聴きいただく。

今夏、日本一の最高気温を競い合っている岐阜と京都をよく行き来しているのだが、確かにうだるほど熱い。先日久しぶりに大阪へ行ったらそよそよと風があってちょっと涼しく感じた。名古屋も岐阜に比べたらそう暑くないのだ。そう、岐阜も京都もまったく風を感じないのである。

岐阜に一涼の風をおこせるような演奏を、うたをと「熱い」思いでいる。